佐藤忠男
シネマ館

人生の特等席

39窃盗団（サンキューせっとうだん）

「人生の特等席」は82才になったクリント・イーストウッドの主演作品である。同年輩の高倉健も「あなたへ」で見事な主役ぶりを見せたから、もう80才台の主演というのは特別なことではないのかもしれないが、高齢化社会に向って元気づけられて、目出たい。イーストウッドが演じているのはアメリカの大リーグの球団のスカウトである。絶えず地方を回って高校野球の試合まで見て、球団に入れたらモノになりそうな奴はいないかと捜す。

近頃はデーター主義で、試合の記録だけ見て選手を選ぶ傾向があり、そんな連中から彼はもう古いと言われて球団での地位も怪しくなっているが、長年の経験とカンによる自信はゆるがない。そんな老スカウトが、さすが視力が怪しくなって、見難いところをしっかり見てもらうために娘を連れて旅をするという話だ。

娘（エイミー・アダムス）は新進の弁護士としての重要な仕事をほうり出すようにして父についてくる。仕事一途で家族には冷たかった父親にどうしても言いたいことがあったからである。こうして理解し合っていなかった父と娘が、旅でいろんなトラブルを一緒に乗り超えてゆく過程ではじめて本当に心が通じ合うようになってゆくという、まあ、かなり上出来の人情話である。あの無口でぶっきらぼうで愛想笑いなどいちどもしたことがないみたいな男が、あるとき一瞬、ほんとはじつに心やさしい人物であることを示す。その一瞬を見てニヤリとすることがこの映画のダイゴ味であると言っていいと思う。しかもそれは演技力というよりも長年磨きあげた風格の何気ない発露である。人間、願わくばこんなふうにきれいに年をとりたい。イーストウッドのクローズ・アップのしわくちゃの頬を見ながらそう思った。じつは私は彼と同年齢である。俺はあれほどしわくちゃじゃないぞ、と思いながら、同時に、あの傲岸不遜ぶりばっかりは逆立ちしても真似られないと思う。まあ、経験の量からくる自信ということなら俺も負けないぞ、と思うのだが、なかなかあんなポーズや表情はできない。

＊「月刊うえの」11月号より

今月はぜひ紹介したい映画がもう一本ある。押田興将監督の「サンキュー窃盗団」である。ダウン症の知的障害を持つ障害者が、悪党どもにだまされて空巣のコソ泥の手先に使われるという話である。障害者を描く映画というものは、彼らへの同情を集めることを第一に考えるために、どうしてもきれいごとで感傷的な物語になりやすい。しかし現実には彼らは、どんな状況に置かれているのか。この映画に出てくる悪党は刑法39条の「心神薄弱者ノ行為ハコレヲ罰セズ」という条項を勝手に解釈して、ダウン症の障害者は泥棒ぐらいしても罪にはならない、と言って彼らに窃盗をやらせる。こんな悪党が現実にはウヨウヨいるのではないか。そんなふうに利用されても、障害者たち自身は、自分に仕事を与えてくれるので、彼をいい人だと思っている。知的障害者たちにはさまざまな保護政策があるし、とくに成人する頃までは家族や施設の人々の眼でよく見守られてもいるが、そのあと、とくに保護者が亡くなったりしたあとはどうなるのか。誰でも気になるところだが、その現実が描かれることは滅多にない。そこをあえて描いているのがこの映画である。

主演の押田清剛は押田興将監督の弟で、実際にダウン症の障害者である。ダウン症の人たちは人種や民族を超えてみんなじつに悪意のない善良な表情をしているという共通の特徴を持っている。その特徴を生かして、この映画は一見明るく陽気でさえもある喜劇として作られている。しかしもちろん本当はこの作品は痛烈な社会派告発映画なのである。ただ監督としては〝じめじめした障害者もの〟にだけはしたくなかったのだという。軽妙な笑いの端々からじつはよく見ると激しい憤りがにじみ出てくる。だまされてもだまされても、それでずる賢くなったり卑屈になったりすることもなく、この人たちは変らず善良な表情を保ちつづける。これってすごいことなのではなかろうか。

知的障害者の行動を喜劇的に描くなんて、ふつうは許されないことだが、本気で彼らの現実に迫るためには彼らの身になって周囲を見る目を持たなければならないし、そうするとこういう笑いはあり得る、と思った。

（さとう　ただお・映画評論家）

「人生の特等席」
11月23日より、丸の内ピカデリー他全国ロードショー
©2012 WARNER BROS. ENTERTAINMENT INC.
「39窃盗団」
11月17日より新宿K's cinema他ロードショー公開

おいしいこと、楽しいこと、
それはいつまでも心に残る
太昌園のご宴会
焼肉 上野 太昌園
上野本店 ☎03-3831-6365
上野別館 ☎03-3831-5335
上野駅前店 ☎03-3832-5324